

## 首里城復元設計についての雑感

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 福島 清  |
| 雑誌名 | 沖縄文化研究  |
| 巻   | 21  |
| ページ | 39-71   |
| 発行年 | 1995-02-28  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/10114/00015756">http://hdl.handle.net/10114/00015756</a> |

## 首里城復元設計についての雑感

福島 清

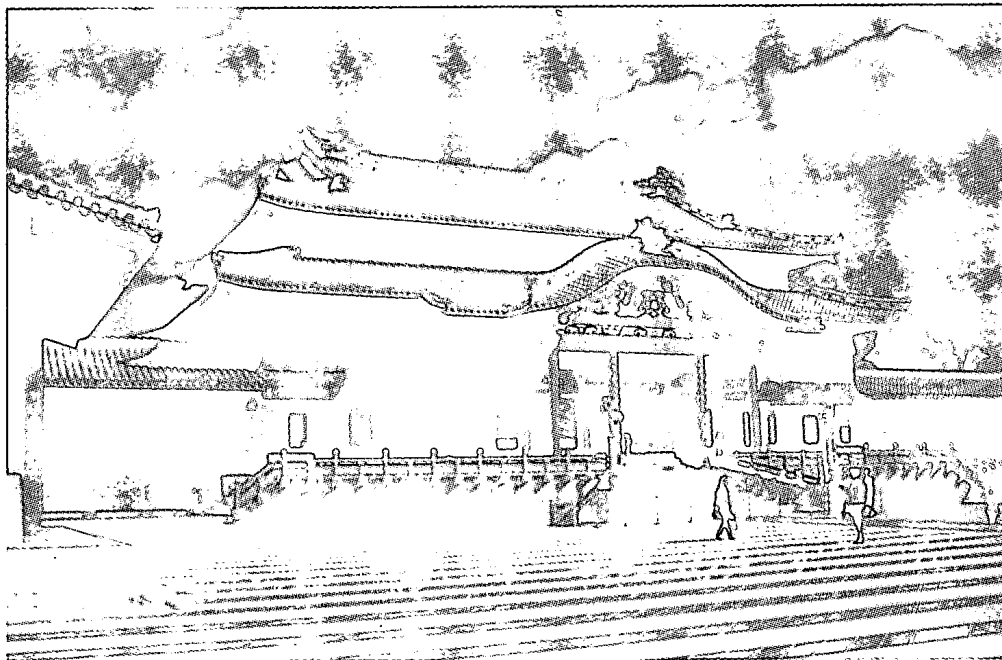
### はじめに

私が首里城の復元整備に携わるようになったのは、昭和六十一年に始まった正殿の基本設計からである。三年間の設計期間の後、平成元年より復元工事が始まり、平成四年十一月に首里城公園としてオープンした。一年半経ったいま、あの多忙な時期をゆっくり見なおす機会を本誌から与えられたものと思い、私なりの首里城復元に関わる雑感を綴ることとした。

私は東京中野区の出身で、学生時代はもとより勤めてからも東京を離れることはなかった。大学卒業後、設計事務所に入ってから日本建築に興味を覚え、早稲田大学の建築史研究室に聴講生として二

年間入学することとなった。当時の研究室は渡辺保忠先生が学科主任として、中川武氏は助手としてご活躍中であり、茶室などの数寄屋建築について授業を受けた。また、工匠・平内家に伝わる著名な木割書である『匠明』の原文の読み下し、その解釈について勉強会が行われた。

ある年の正月、事務所の所長に連れられて日本建築の大家に年始の挨拶に行くこととなった。その大家とは田辺泰であり、家は沼袋あたりにあったと思う。玄関を入るとすぐ和室の広間があり、その中央にデンと構えた田辺大先生（おおせんせいと皆が呼んでいた）が座り、両脇には先生の弟子と思われる人がずらりと並んでいた。所長が挨拶したあと私が紹介され、大先生から日本酒の返盃を受けありがたく飲み干した。若い人達が勉強して今後の日本建築を支えていってほしい、という趣旨のことを述べられていたように記憶し



復元された正殿正面（図1）

ている。恐縮していたためにまともに顔を見る機会もないまま、大先生本人との唯一の出会いには終わった。

その後、社寺建築を主たる業務としている建設会社の設計部に入ることになった。そこでは見よう見まねで線を引いては、現場で監督や大工に怒られるというようなことをしながら、寺の本堂の屋根替えから庫理や客殿、神社の設計などを手掛けることができた。しかし、この会社は次第に経営が怪しくなったため、現在勤めている株式会社国建の東京事務所にお世話になるようになった。このときすでに三十二歳であった。

東京事務所の仕事はあまり面白くなく自棄になりかけていたころ、出張で東京に来ていた本社役員から沖縄本社は人手が足りないのので来てみないかと誘われた。先が見えかけた当時の生活が変わる期待に動かされ、はじめて東京を離れて生活することに決めた。三十七歳になる十数日前、うきうきした気分で那覇空港に到着した。そして、翌年からまさに突然首里城に出会い、以後の長い付き合いが始まることになった。

ところで、村上春樹の『遠い太鼓』という旅行記の冒頭には、人生のなかでの四十歳という節目について、興味深い考えを述べている。やや長くなるがその冒頭の文を引用する。

「四十歳というのは、我々の人生にとってかなり重要な意味を持つ節目なのではなからうかと、僕は昔から（といっても三十を過ぎてからだけれど）ずっと考えていた。とくに何か実際的な根拠があっ

てそう思ったわけではない。あるいはまた四十を迎えるということが、具体的にどうということなのか、前もって予測がついていたわけでもない。でも僕はこう思っていた。四十歳というのはひとつの大きな転換点であって、それは何かを取り、何かをあとに置いてゆくことなのだ、と。そして、精神的な組み換えが終わってしまったあとでは、好むと好まざるとにかかわらず、もうあともどりはできない。試してはみたけれどやはり気に入らないので、もう一度以前の状態に復帰します、ということはない。それは前にしか進まない菌軍なのだ。僕は漠然とそう感じていた。」

彼は三十七歳のときに「ある日突然、僕はどうしても長い旅に出たくなったのだ」「異質な文化に取り囲まれ、孤立した生活のなかで、掘れるところまで自分の足元を掘ってみたかった」と決意し、三年間ヨーロッパを旅しながら『ノルウェイの森』『ダンス・ダンス・ダンス』という二冊の長編小説を書き上げた。

私が沖縄に来たのは首里城というテーマがあったからでもなく、また四十歳という人生のある節目を意識した行動でもなかった。どこにでもあるような偶然が重なって、沖縄で首里城に取り組むことになり、その真っ只中で四十歳を通過してきたわけである。人々は四十歳という年齢を迎えるにあたって、様々な思いを込めてこの人生の通過点を考えてみたり、また振り返ってみたりするのであろう。そんな風に自分を考えてみたとき、首里城とともに過ごした日々が確かにある転換点であったような気がするし、首里城以前に戻ることができなくなっている自分を感じはじめている。

## 一、首里城復元設計の経過

昭和六十一年、嘉手納基地内の工事監理業務を無事に終え那覇の本社に戻った私は、真夏の炎天下の下クレーターの効いた部屋に居られる幸せに、つつい眠くなってしまう日々を送っていた。そんなある日、首里城復元の仕事があり、私の所属する部が担当することになったことを知らされた。日本建築を若干手掛けたことがあり、暇そうにみえた私に断る理由は見当たらなかった。前年より木材調査等を行っていた中本清氏と平良啓君に私に加わり、三人のチーム編成となった。白昼夢のような気分の中で首里城との出会いが始まり、あの田辺泰が著した『琉球建築』との付き合いも本格化したわけである。業務は「首里城正殿基本設計」という名称で、国営沖縄記念公園事務所が発注者となり、社団法人日本公園緑地協会がこれを受注し、我々がその作業スタッフとして設計を進めることになったのである。

首里城の復元計画はこの年以前にすでにスタートしており、昭和五十九年に沖縄県が策定した「首里城公園基本計画」がその後の諸計画の骨格的な役割を果たした。この計画は「首里杜構想」ともよばれ、城とその周辺を含む約一八ヘクタールの範囲を歴史風土を活かした都市公園として整備する計画であった。これを受けて、昭和六十一年に首里城跡の約四ヘクタールを国営公園事業として、周辺の約一四ヘクタールを県営公園事業として一体的に整備することが決定された。同年度末には国営公

園部分の基本計画が練られ、首里城復元整備の意義が以下の四点にまとめられた。

一、貴重な国民文化遺産の回復——わが国の特色ある建造物を蘇らせ、沖縄の建築文化の水準を明確に提示する。また、立ち遅れている首里城研究に契機を与える事業となる。

二、新たな県民文化の創出——戦禍で失った沖縄の歴史・文化の象徴である遺産を取り戻し、豊かな県民性を培う。さらに、事業そのものが実現に向けた共同・協力が必要とする現代における創造的な文化活動の一環である。

三、伝統技術の継承と発展——伝統技術の把握・継承・集積を実現できる機会を提供し、建築、土木、造園、歴史、美術、工芸、考古などの協力提携により、多様な研究分野の発展を促す。

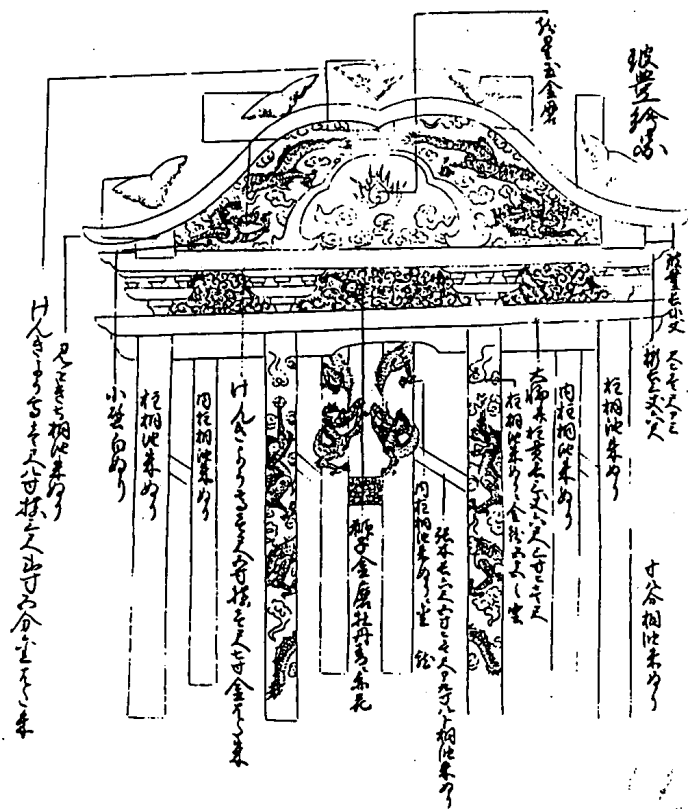
四、歴史的風土探訪の場の形成——特色ある歴史的風致を創出し国民の風土探訪の場、諸外国との交流の場として沖縄県の振興に寄与する。

六年後の沖縄復帰二十周年の開園に向けて、昭和六十一年には正殿の基本設計とともに、その上位計画としての国営部分の公園基本計画が同時進行したのである。

正殿基本設計作業は事務局と作業班が検討・整理した内容を、県内外で活躍している専門家九名と関係機関からの協力委員六名で構成された委員会がさらに討議・検討を加える形で進められた。初年度の目標は正殿に関する基礎資料の収集と解析を中心に、復元の基本理念や方針をたて、基本計画を策定することであった。資料については田辺泰の『琉球建築』をはじめ、鎌倉芳太郎の『沖縄文化の

遺宝』等の書籍、歴代冊封使の記録や築造に関する記録、また戦前の写真、旧国宝指定された昭和初期の修理時の図面（『国宝建造物沖繩神社拝殿図』、以下「拝殿図」と略す）等が収集され、検討が加えられた。さらに、正殿跡の遺構発掘調査も前年度より引き続き行われており、委員会でもその成果が随時発表された。しかし、これらの資料からは外観や基本的な構造が分かる程度であり、王宮として使われていた正殿の実像が浮かび上がってはこなかった。

ところが、たまたま見ていた『沖縄文化の遺宝』の中に、正殿唐破風の絵図にくずし字が記されている小さな口絵を見つけた。何度か関係部分を読んでいたが、口絵は見過ごししていたのだ。その絵図にはいままで得ることのできなかった柱の龍の文様や彫刻類、そして彩色等の情報が克明に記されていた。復元にとって大変重要な絵図であり、これが揃っていれば不明部がかなり解決できる



『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』より  
「破豊絵図」（図2）



のではないかと考えられた。かつて早大で学んだ『匠明』の原文の読解がこんなところで役立ったわけである。この資料は『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』（以下、『寸法記』と略す）と題され、乾隆三十三年（一七六八）に正殿が改修された時の記録であった。絵図が鎌倉芳太郎氏所蔵のものであり、現在は沖縄県立芸術大学に寄贈されていることが分かり、その全容を見ることが可能になった。また、寄贈された氏のコレクションの中には、古文書類を書き写した膨大な量のノート類、首里城でのさまざまな儀式時のレイアウトを示す絵図、書籍に掲載されなかった写真のガラス乾板など貴重な資料が数多く含まれていた。これらの資料発見により正殿の設計は一挙に進展することとなり、なかでも『寸法記』は王宮時代を再現するためにはなくてはならない一級資料となった。昭和六十一年はこれらの資料を歴史家と夜遅くまで読み合わせたり、他資料と比較検証しながら解読する作業に明け暮れた。

「拝殿図」と『寸法記』の柱割りがほぼ一致し、「拝殿図」の天井伏図の鴨居配置と『寸法記』の内部建具位置が合致することが確認されたことで、『寸法記』の資料しての確かさが実証されるところに、「拝殿図」の構造や表記されている各部寸法などが時代的に遡って運用できることが可能となった。このような資料分析に基づき、初年度の基本設計では「一七二二年に再建され、一九二五年に国宝指定された正殿の復元を原則とする」という基本方針のもと、建築様式、規模、位置、地盤高に対する考え方をまとめ、基本設計作業を終えた。

昭和六十二年度は正殿予備設計という名称の作業で、前年度の成果を基にさらに資料の解析を進め、細部についても検討を加え実施設計までの与条件を整理することとなった。引き続き同じメンバーによる委員会を中心に、木材や石材の市場調査、縮尺五分の一の大龍柱模型、縮尺十分の一の正殿構造模型の製作などが行われ具体的な検討に入った。

また、この年には前年度の首里城地区基本計画の一環として、北殿・南殿・奉神門などの御庭周辺の建築物の基本計画や、造園・土木の基本設計、庭園・植栽計画、利用運営計画などの業務が一斉にスタートし、各分野の調査・検討が活発に行われた。

予備設計での検討の結果、遺構保護のための地盤のかさ上げ、大龍柱の材質や大きさ、代用木材樹種の決定、屋根の空葺工法の採用、防災施設の充実、工事時の素屋根の採用など多岐にわたる事項についてその方向性が定まった。この決定を受けて国は直ちに代用樹種のタイワンヒノキの購入を始めた。台湾ではこの頃、自然保護などの理由でヒノキの伐採量の制限が論議されており、材の確保とともに価格の高騰が懸念されていたが、幸いにもその影響が波及する前に約三二〇立方メートルものタイワンヒノキを購入し、工事着工までの乾燥期間も確保できた。

昭和六十三年の夏に入り、いよいよ最終の実施設計が本格的に始動した。前年までは年三回の委員会を経て作業を進めてきたが、この年は細部にいたる論議をより深めるため、実施設計委員会のもとに四つの専門部会が設置された。木造部会は主に木構造にかかわる諸課題について検討するとともに、

丘陵地にある正殿に及ぼす風の影響が懸念されたため、模型を使った風洞実験や、伝統的な継手・仕口の原寸大模型での強度実験も行った。瓦類部会では瓦や磚などについて、県内各種の原土での焼成実験に基づく色調や性能を確認した。彩色部会では各部塗装・彩色の色調、材料、文様、工法について細部にわたる検討が加えられ、さらに彩色技法や文様などの参考事例調査として、中国、韓国、国内へ相次いで出かけることになった。彫刻部会では資料分析に基づいた各部形態の究明が進められ、龍柱・礎盤・高欄・透欄間・龍頭棟飾の原型、唐破風妻飾・懸魚の下絵などが次々と製作されていた。年三回の委員会だけでも事前打合せや資料の準備でハードな業務であったのだが、専門部会の設置に伴い、その年度内に二十回程の検討会と各種調査・実験が行われることになり、忙しさはピークを迎えることになった。

この頃には我々の作業スタッフも十名ほどになり、各専門部会ごとに専任者を配置して分担作業方式で進めることができるようになっていたが、設計事務所としては特殊な業務であり、また残業・徹夜が続くハードな作業のため、プロジェクトから離脱する者や病気になる者も出た。私が事例調査や二十回程の検討会全てに参加できたのは、この頃のスタッフの頑張りや丈夫な体を授けてくれた両親のお陰だと思っている。しかし、残念ながらその両親も首里城の完成を見ずに、父はその年に、母は二年後に他界してしまった。

各専門部会で検討された事項は委員会でも再度討議され、全体的な調整を行い各部の詳細が決定され

ていった。こうして多岐にわたる項目が整理され積み上がった結果を、平成元年には設計図や材料調書、工事仕様書などにまとめあげ、三年間の設計作業が終了し、工事へとバトンタッチした。

## 二、首里城の沿革

正殿の復元設計は単に建築的な細部の検討だけに止まらず、琉球独自の歴史や文化についてもまた調査・研究が必要とされた。まさに首里城の復元を契機として各分野の研究が進み、首里城が立体的な輪郭を持つことができたのである。ここでは首里城を理解する上でポイントとなる事項を設計作業の中で得られた成果として記しておきたい。

### 首里城の創建期

沖縄では十二世紀頃から本格的な農耕社会に移行する中、各地に按司と呼ばれる有力者が台頭しはじめ、グスクと呼ばれる拠点を中心に攻防が繰り返えされていた。沖縄本島では十四世紀に入りこれらの按司を王とする三つの勢力が形成され、それぞれを「北山」「中山」「南山」と称して互いに拮抗していた。この時期を三山時代と呼ぶ。そして、三山は一四二九年に尚巴志によって統一され琉球王国が成立し、その居城が首里城となった。

首里城の創建時期は未だはっきりしていないが、正殿跡の発掘調査では最古の遺構は十四世紀末

まで遡ることができるといわれている。沖縄では十三世紀末から十四世紀はグスクが盛んに造営された時期にあたり、首里城の初期段階はこのようなグスクの一つであったと推定できる。しかし、グスクの一つであった首里城も、一四二七年に建立された「安国山樹花木記」の碑文が伝えるところによれば、城周辺に人工池・龍潭を掘って造園整備を行ったとあり、また文献記録では翌二八年に中山門が創建されている。したがって、すでにこの時期には城としての十分な威容を整えていたことになる。

## 焼失・再建の歴史

首里城は、文献資料によれば過去何度か大きな火災に見舞われ、その度に再建を繰り返していたことが分かる。再建（創建を含む）から焼失までを一区分として分けると、大きく以下の四期の区分になる。

### 第一期 創建～一四五三年

一四五三年の王位継承をめぐる争い（志魯・布里の乱）の戦火で首里城は全焼した。この戦火で焼けたと思われる基壇遺構が今回の発掘調査で見つかっている。再建年は分かっているが、一四五八年に万国津梁の鐘が正殿に掛けられたことから、この頃にはすでに再建を終えていたと思われる。

### 第二期 ?～一六六〇年

一六六〇年、失火により再び首里城は全焼した。このため、国王は大美御殿へ移居し、六三年の冊封の式典も大美御殿で行った。財政難のため一六七一年にやっと再建され国王は首里城に戻った。

### 第三期 一六七一〜一七〇九年

一七〇九年十一月、国殿（正殿）および南北諸殿ごとく焼失する、とある。薩摩藩から材木提供を受け、一七一二年に幾つかの施設を再建し、一七一五年に全ての完成をみた。

### 第四期 一七一二〜一九四五年

昭和三〇八年に国宝として解体修理を行ったが、沖縄戦により首里城はアメリカ軍の集中砲火を浴び、ことごとく灰塵に帰した。

## 立地と城郭

首里城は那覇市東部の標高二二五メートルほどの丘陵地に立地している。東方の弁ヶ岳を起点としたこの丘陵地の南北には二本の河川が城下町首里を囲むように流れており、城内からは西方の那覇の町や港はじめ、東方の太平洋などほぼ全周の遠望が可能である。また、町のいたるところに湧水があり、城の南東の三箇とよばれる地域では古くからこの水を活かした泡盛造りが盛んであった。このような城の立地は「風水」上からも優れており、自然がもつ「気」がみなぎる良地と考えられている。

城壁は丘陵地の地形を巧みに活かしながら、美しい曲線で幾重にも城を取り巻くように造られている。この城壁は大きく内郭と外郭に区分でき、歴史的な変遷を経て拡大されてきたものである。内郭は創建当初のものと推定されており、東西約三五〇メートル、南北約一四〇メートルの広さをもつ。東西の両端の一段と高くなった城壁上には、東（アガリ）のアザナ、西（イリ）のアザナと呼ばれる遠望所がある。歓会門・久慶門が付く北側の外郭は尚真王代に、継世門が付く東南側の外郭は尚清王代に築造されたものである。

#### 主な施設配置

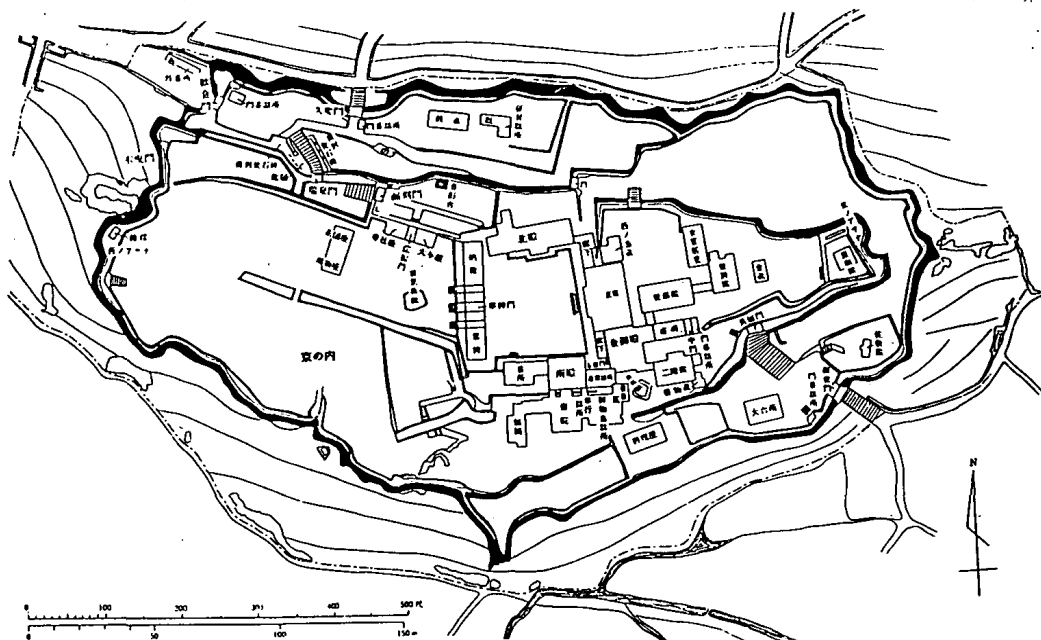
城内は幾つかの城壁や門で仕切られた小さな郭をもち、その中心的な位置に御庭（ウナー）と呼ばれる広場がある。この御庭を取り囲むように西を正面とした正殿、南側に南殿・番所、北側に北殿、西側に奉神門が建っている。御庭では中国皇帝派遣の使者（冊封使）による琉球国王の任命式、冊封式典や王府の重要な年中行事などが行われた。正殿一階は国王が政治や儀式を行うときに出御するところ、また、北殿は行政上の手続きや書類作成、摂政や三司官が重要案件について詮議する場、番所は城の公式な取次所、南殿は薩摩在番奉行の接待所など、それぞれ重要な役割を果たしていた。まさに御庭周辺は行政上の中枢機関が集中する王府の心臓部であった。

正殿の裏にあたる東側には黄金御殿、世添殿、世誇殿、二階殿などの建物があり、この一帯を御内

原（オウチバラ）と呼ぶ。ここは国王や親族、女官たちの日常的な生活が行われたところであり、御庭周辺が「表」とすれば御内原は「奥」「内」にあたる男子禁制の地であった。城の南西部一帯には「京の内」と呼ばれる城内最大の祭祀空間が広がっている。沖縄のグスクが石積や木々で覆われた拝所をもつところから、グスクはこの聖域を中心に発達したものであるという説もあり、この説に従えば「京の内」は首里城の発祥にかかわる場所といえる。現に城内の各施設配置は奉神門の西側で「京の内」を避けて北側に中心軸をずらしており、「京の内」の重要性を示しているように見える。

### 三、首里城建築に関する幾つかの課題

長いようで短かった三年間の正殿の設計作業が終り、幾つかの課題は工事に入ってからもお継続して検討を加え、平成四年十月に完成を見た。だが、いま改め



首里城平面図『首里城入門』より（図3）



て当時の作業を見直したとき、今後とも引き続き検討してゆかねばならない課題が残されていることに気付く。これらはまだ未整理の段階ではあるが、ここではその中から幾つかの課題について、設計作業で得た情報と重ね合わせながら記しておきたい。

## 大龍柱

正殿建築の特徴は、日本建築の様式をベースとしながらも、いたるところに中国的な意匠を取り入れた、いわゆる折衷様式の完成度の高さにある。折衷がうまく融合した独特な琉球様式になっているともいえる。正殿基壇前面を飾る石高欄は中国宮殿の様式を模して造られているが、高欄柱を支える持ち送り石は鳥の嘴のような顰（しかみ）彫りが施され、柱頭部は逆蓮頭や握蓮といった日本建築の禅宗様の特徴を持っている。中国紫禁城での高欄は持ち送り石の先端に螭首（ちしゅ）と呼ばれる龍に似た動物の頭部が、また柱頭部には龍や鳳凰が彫刻されているものが多く、意匠上の違いが見られるが、正殿の中央付近にある親柱上の獅子は中国建築では良く見かける形式である。このように高欄一つにも、中国と日本の様式を折衷して独特の雰囲気にとめた特徴をもっている。

正殿基壇中央には、約四五度の角度でハの字形に下が開いた石階段が取りついている。この階段両側にも同様の石造登高欄が廻り、その両端には大小の龍柱が一对づつ立っている。全体として透視図的な奥行きを感じさせる構成である。階段上部にある小龍柱は高欄が階段に向け角度を変える位置に

立ち、高欄親柱を兼ねたものとなっているが、階段下にある大龍柱は高さ三メートルほどもあり、大きな台石の上に乗って高欄とは直接連続していない独立した形態となっている。

このような構成のなかでひととき特徴的なものが、正面の一对の大龍柱である。記録からこの大龍柱にも幾つかの歴史的な変遷があり、それに対応するものと考えられる幾つかの遺物も残っている。

はじめて首里城に大龍柱が造られたのは一五〇八年のことであり、翌九年の百浦添之欄干之銘には「宮殿の前面に欄干なく、青石を削り左右の基壇に欄干を設置して中華宮殿の制にならう」と記されており、このときに欄干と同じ青石で造られたものと推定される。青石とは中国産の輝緑岩であり、

沖縄では十五世紀初期から十六世紀初期までのおよそ一世紀の間に石碑や彫刻物などに多用されており、安国山樹花木記碑、首里城龍樋、円覚寺放生橋、玉陵石獅子などが現存している。正殿跡の発掘ではこの青石の彫刻片が見つかっており、大きさや形から大龍柱の残欠片の可能性がある。

一六六〇年には城が全焼しこの大龍柱が破損したため、六六年には儀保親雲上為宜が御城龍柱修造の命を受けて石材を捜し求め、翌年には造り終えたとある。このときの石材は沖縄南部で入手しているところから、ニービの骨（ニービヌフニ）と呼ばれる細粒砂岩と考えられる。県立博物館にはこの二代目の大龍柱の一部とみられる細粒砂岩製の彫刻残欠が収蔵されている。

二代目大龍柱も一七〇九年の火災で損壊を被り、十二年に謝敷宗逢なる人物が彫刻を完成させたことが家譜より分かっている。このときには、豊見城間切の砂長（瀬長か？）の海から四本の石材を掘

り出している。また、旧龍柱二本は五個の石を使って繋いでいることや、高さは旧龍柱は一丈であるが新しい龍柱は一丈三尺あると書かれている。こうしてでき上がった三代目の大龍柱が戦前まで残っていたものだが、琉球処分（一八七九年）後に首里城に駐屯した熊本鎮台兵により破壊され、短く繋ぎ合わされたと伝えられている。明治末期から大正時代の写真には、側面を捕強金物で繋いだ短い大龍柱が写っている。また、写真では大龍柱が正面を向いているため、現在の向かい合った大龍柱に疑問を持つ人もいるが、王府時代の設計書にあたる『寸法記』の絵図には明らかに向かい合って描かれており、この資料が持つ性格からみても向かい合った形態が正しい姿といえる。琉球処分後の首里城内は多くの改変が行われたために、写真などの資料はこの改変を差し引いて考えねばならない。いずれにしても、このように大龍柱一つ取り上げても幾多の変遷の跡が浮かび上がってくる。

さて、この大龍柱には一体どのような意図やデザインのルーツがあるのだろうか。十六世紀初頭に中華の制度に倣って高欄とともに取り入れた大龍柱とは、琉球独自の発想なのだろうか。

建物の柱の一部として龍が柱に巻きついた石彫刻の例は中国の古建築ではよく見受けられが、首里城の大龍柱のように柱に巻きつかず、全く単独に自立した龍は他に例を見ないといわれている。私は海外事例調査の折りに、首里城のような龍柱の類例がないか中国や韓国の古建築担当者に尋ねたが、このような事例はわが国には無い、との答えであった。ただ韓国では“幢竿支柱”とよばれる龍の旗竿があり、歴史的にも古くから使われていたようである。形態は首里城の大龍柱のように直立してお

り、慶州民俗工芸村の幢竿支柱は銅製で高さは五、六メートルほどある。また韓国国立中央博物館には統一新羅（八、九世紀）の時代に造られた高さ七四センチメートルの“金銅幢竿龍頭”が収蔵されている。目的や用途は全く異なるものの、首里城の龍柱とは形態的には共通したデザインである。中国では龍をデザインしたものは多く見受けられるが、前述の通りこのような例は見当たらないという。

最近中国で購入した書籍をゆっくりみる機会があり、大龍柱と幾分関連する事項に気がついた。一つは“光緒大婚図”という絵図であり、紫禁城太和殿で行われた皇帝の婚姻儀式の様子が描かれている。この中の太和殿正面階段付近には陶器製の台に細い柱を差し、その柱にはそれぞれ赤・緑・青の龍が巻きついたものが置いてある。絵図では太和殿正面上部の布製の大きな飾り幕を支える柱として臨時に設置されたものと見える。韓国の幢竿支柱が旗を掲げるために使用した点と共通しており興味深く感じられた。首里城の大龍柱の当初の目的が何かを掲げる道具として造られ、その後の変遷を経て象徴的な彫刻物になったという可能性も考えられるのではないだろうか。もう一つは、桂林市郊外の莊簡王墓にある石望柱である。石望柱とは墓陵参道の両脇に並ぶ駱駝や象、あるいは人間などをモデルとした石象生と呼ばれる彫刻群の一つを指す。石望柱のデザインは様々であるが、莊簡王墓のものは八角形の柱に昇龍が巻きついて独立しており、正殿の大龍柱を連想させる。おそらくこれらの石象生群は、未来永劫この地が穢されることのないよう、王墓を守るために造られたものであろう。正殿の大龍柱が石望柱を模した象徴として造られたという可能性も、また考えられることである。

しかし、気がついた参考事例は右のような状況であり、大龍柱のデザインのルーツは依然として定かではない。一方、形態的に大龍柱を見てみると、当初は小龍柱のように高欄の親柱として階段下部で支えていたが、次第に独立した形態の大龍柱へと発展したものとも考えられるが、親柱に龍が使われた類例がなく、また、独立してゆく過程も判然としていない。当時、琉球独自のデザインとして龍柱を親柱とした高欄を造った、と結論付けるのは早計であろう。

琉球の石造文化を探る上からも首里城の大龍柱は興味深い事項が多いのだが、しかし不明な部分もまた多く含んでいる。これらの課題解決のためには、現在所蔵されている関連発掘遺物の詳細調査を丹念に推し進めてゆくことや、創建当初からその後の変遷までの関連記録を収集すること、高欄やハの字形の階段との造型的な検討や建造物としての納まり上の検討、また琉球や中国での類似石造物の把握、アジア的な視野に立った王宮での龍の意味の捉え直しなど、多面的な検討を加えながら再度じっくり見詰め直すことが肝要と考えている。

## 二つの寸法記

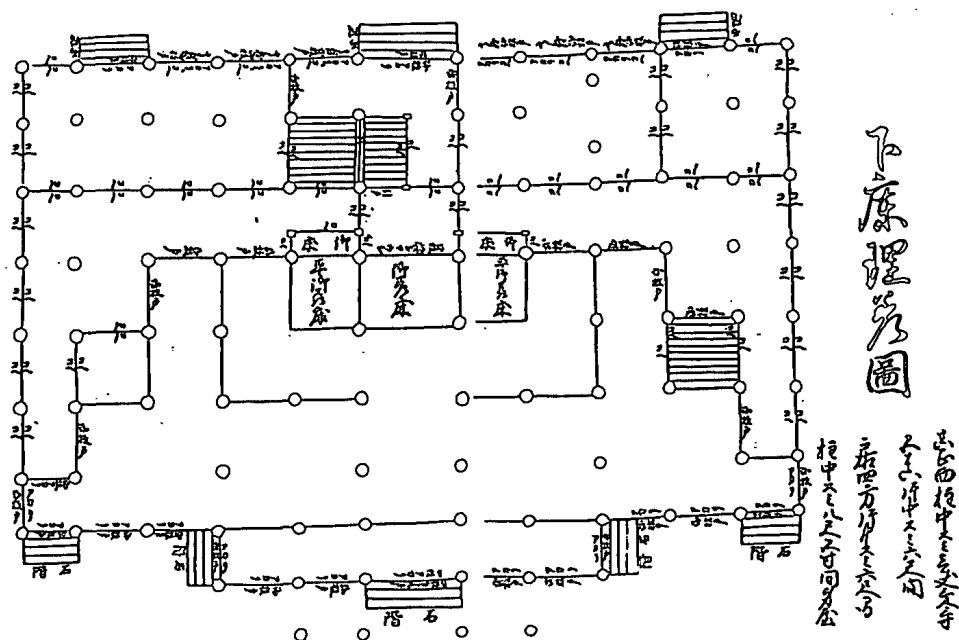
『寸法記』とは『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』の略称で、乾隆三十三年（一七六八）に作成された正殿修理工事に関する仕様書といえる史料である。この史料は大きく二つの記述によって構成されている。一つは正殿の主要部分について絵図とともに彩色や寸法などを記した「御絵図」、

もう一つは各部での必要木材の寸法や本数、それに伴う金物類の種類や数などを示した「御材木寸法記」である。本史料は鎌倉芳太郎氏所蔵コレクションのなかの一つであり、「御絵図」は原本の形だが「御材木寸法記」は鎌倉氏がノートに書き写したものが現在沖縄県立芸術大学に納められている。王宮時代の正殿を最も良く伝える史料であり、復元設計の際に一級資料と位置づけられた。

この『寸法記』と類似した内容をもつ史料がもう一つ別にある。『百浦添御普請絵図帳』と表記された史料で、三冊の『百浦添御普請日記』とともに道光二十六年（一八四六）に記されたものである。他の記録からも正殿はこの年に重修されており、この工事を時系列の日記風にまとめ、さらに工事仕様書を添えた一式の報告書の形式を取ったものであろう。『寸法記』と『百浦添御普請絵図帳』の間にはおよそ八十年間の時代差があるが、両史料を概観したところでは記録されている形式や内容はほぼ同じであり、正殿建築はその骨格的なところは全く変わっていないことが分かる。詳細な比較検討は今後の研究課題となるのだが、ここでは特に絵図に描かれている平面上の違いについて簡単に触れておきたい。

正殿一階での違いは大きく二箇所にある。その一つは御差床とその裏手の階段。"おちよくい"との中間にあたる小部屋が変化している点である。"おちよくい"とは国王が一階で行われる政治や儀式に参加する際に、奥の領域である二階から表の領域である一階御差床に出御するために使用した階段のことである。『寸法記』の平面図では表と奥をつなぐこの小部屋は一階とは完全に壁で間仕切って

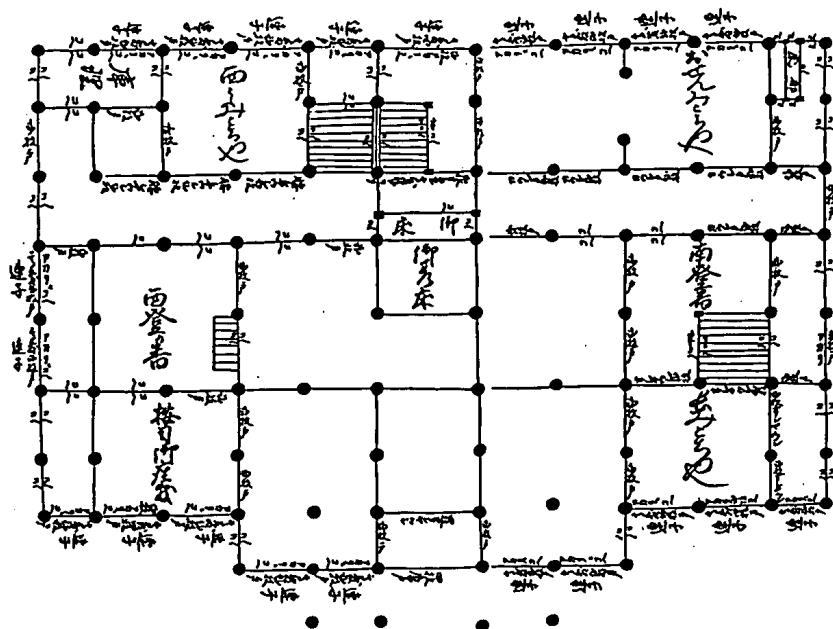
あった。しかし、『百浦添御普請絵図帳』には正面右手の廊下の突き当たりに、小部屋へ通じる一枚引戸を設けている。正月に行われる王府最大の年中儀式「朝拝御規式」の際には近習がこの小部屋に詰め、奥と表との儀式進行上の連絡や指示を執り行ったとある。おそらくこのような取次所としての機能上から、壁を建具に変える必要が生じたと考えられる。二つ目は、右手廊下外部側の壁を二枚戸に変え、外部との出入口を一つ増やし、ここを囲うように廊下と一階広間にも建具を増やした点である。さらに右手階段奥の一角にも格子戸で囲うような空間を設けている。このような改変は、最初に挙げた小部屋に設けた建具とも連動しているように見える。一階の表の領域から奥に通じる廊下を厳重にし、御内原（奥）の中心的な建物である黄金御殿付近から一階の広間を通らずに直接この廊下へ出入りできるようにしたのであろう。建具一枚の変化



『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』（1768年）より「下庫理差図」（図4）

により奥と表をつなぐ領域が右手廊下部分に出現し、関連する周辺に影響を及ぼしたことを示しており、時代的な変遷を探る上で興味深い。

正殿二階では幾つかの建具が障子付きになったり、城内の重要な火の神を祀る部屋（おせんみこちや）の床の間に新たに障子が設けられるなど、小さな変化だけがみられる。ただし、乾隆時代の『寸法記』には二階御差床の右手前に敷居を示す線が描かれているが、道光時代の『百浦添御普請絵図帳』にはこの線が描かれていない。設計段階では御差床の性格上、この位置に敷居があるのは不自然であり、おそらく誤記であろうと判断した。だが、単純に誤記と片づけるわけにはいかない。御差床が中央の位置に改められたのは一七二九年のことであり、それ以前は正面右手、すなわち南側の部屋にあった可能性がある。とすれば、この敷居はその時の部屋割りに関係している可能性があり、



二階差図

『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』より「二階差図」(図5)



現在のところ、以前の御差床の形態や位置について特定できる史料に乏しく判断はしかねるが、今後の研究次第では我々が誤記としたこの線が意味を持つてくることも考えられる。

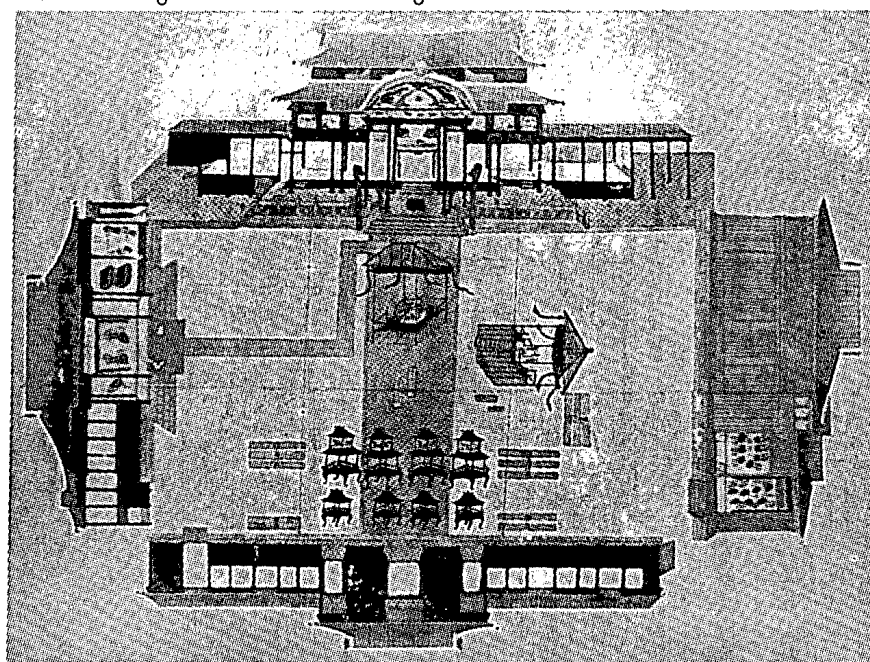
## 建築彩色

正殿彩色が判明している部位は『寸法記』に示された唐破風部分や御差床周辺、おちよくい、おせんみこちゃ床の間、二階連子などの場所に限られている。このため、実施設計段階で特定されなかった外壁や内壁などについてさらに究明を進めるとともに、その色調を決定するために彩色部会を開いて検討を重ねた。その結果、戦前の正殿を見た多くの古老からのヒヤリングのなかに、昭和の修理時には外周柱の一部に弁柄が残っていたとの有力情報を得ることができ、ようやく色調を決定することができた。しかし、残念ながら現在にいたるまで、『寸法記』に記されていない部分の彩色に関してはヒヤリング以外に色調を特定できる確かな資料は見つかっていない。

戦前、鎌倉芳太郎氏が尚家所蔵資料を撮影した二枚の絵図、「城元仲秋宴之図」「城元之図」は御庭を中心とした建物を起し絵風に描いており、彩色を考える上で重要な資料である。この絵図は鎌倉氏の推定では尚敬王から尚穆王（一七二三～九四年）の時代のもものとされており、首里城に冊封使を迎え宴を催すときの道具配置が示されている。残念ながら写真はモノクロームであるため建物や道具類の色調は判断できないが、各部に微妙な濃淡があり、

原画は彩色画の可能性が高い。建物外壁の濃淡を見ると、正殿、北殿、奉神門がほぼ同じ程度の濃さであるのに対し、南殿・番所は明らかに薄く描かれており、豎板張りの目地や板目までが分かる。また、『寸法記』でも彩色が明らかな正殿唐破風部分と外壁はほぼ同じ濃度で描かれている。したがって、この絵図の表現から、正殿・北殿・奉神門は彩色が施されており、南殿には彩色がない、また、正殿の外壁には唐破風部分と同様に彩色が施されていた、ということが読める。しかし、『寸法記』には真塗（黒色）と記されている唐破風妻壁の墓股の濃淡が両絵図では明らかに違っているなど、細部については正確さに欠け、判明している部分から他の部分の色調を読み取るには無理がある。

一八四六年の正殿重修時の史料では、修理に必要な彩色材料の種類とその量が記されている。これを見ると唐朱・丹朱・金箔・石黄・砂紺青・石緑・藍浪・土



「城元之図」鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』より(図6)

黄・弁柄朱などの顔料類に加え、漆や筆類、紙、荏子油などが挙げられており、当時の彩色に関する重要情報を秘めている。材料の単位面積あたりの使用量を想定すれば、史料から各色彩のおおよその面積が判明できることとなる。しかし、ここで問題となるのはこの時の彩色修理が建物の全面にわたるものなのか、新補材やはげ落ちた所だけの部分的なものなのか、史料からは判然としないことである。また、推定できる材料の単位面積あたりの使用量についても、当時の顔料造りや彩色技術が解明されていなければ正確な算定はできない。

一方、沖縄の建築彩色を考えると、当時琉球王府での重要な交易品であり、高い技術レベルを誇っていた漆器との関連を押さえておく必要がある。貝摺奉行所を中心とした漆器の技術集団が建築彩色の指導的な役割を担っていたと考えられるからである。おそらく正殿の重要な部位は、彼らの高い技術によって創意工夫した加飾が行われたに達しない。琉球での漆器製作の技術や材料などの解明が、正殿建築の彩色の謎を解く鍵の一つであろう。

建築彩色は時代の雰囲気によって様々な変化を遂げてゆくものであり、構造物のようにしっかりとその痕跡を残すことが少ないために、日本での研究はあまり盛んでないと聞く。しかし、琉球での建築彩色は漆器という文化に支えられながら、近世まできちんと行われてきたことは確かであり、琉球の建築を特徴付ける重要なファクターである。アジアの建築とも深く関連する建築彩色の探究は、今後の研究に期待するところが大い。

## 唐破風（からはふ）

正殿正面中央にはひとときわ裝飾性の高い緩やかな曲線を持つ屋根がある。建築用語では屋根瓦先端のすぐ下にある厚板を破風板と呼び、中央が上向きに反り上がり、両端で下向きに反っている破風を唐破風と呼ぶ。「唐」の文字を使うが日本の建築様式であり、鎌倉時代の法隆寺聖霊院にある遺例が最も古く、桃山時代には寺社建築などに盛んに用いられた。正殿は一七二九年に別称として「唐玻豊」と改字しており、元来は建築の部位名称「唐破風」に縁起の良い文字を充てて建物の総称としたのである。

ややこしい話だが、「唐玻豊」はもう一つ別の名称にも使われている。正殿二階正面（西側）にある小部屋もまた「唐玻豊」と称している。正月の朝拝御規式のときに国王はこの部屋で椅子に座り、御庭に並ぶ諸官とともに式に臨んでいる。この時の部屋の諸道具の配置を描いたものが『図帳（当方）』の中にでてくる「唐玻豊御座構之図」である。御庭から見上げるこの部屋の周囲には、上部の妻壁に宝珠や龍雲の彫刻、左右の柱に立体彫刻された龍、下部に龍柱に飾られた階段などがあり、まさに正殿の総称として呼ぶに相応しい裝飾性に富んだ場所となっている。

正殿正面に初めてこの唐破風形式の屋根が登場する時期はいまのところ不明であるが、『琉球国由来記』（一七一三年）の朝拝御規式の項では「聖主は百浦添の真正面の御轎椅に座し、（唐破風とも

称す)。。。とあり、すでにこの時期からこの部屋を唐破風と称していたことが分かる。正殿は一六六〇年に焼失し七一年に建物が再建されたが、再び一七〇九年に焼失し、一七二二年頃に再建されている。『由来記』の編集作業は一七〇三年から始まっていることから、一七二二年の再建以前からこの部屋を唐破風と呼んでいたことになる。すなわち、一七二二年の再建以前の正殿にも唐破風形式の屋根があったため、部屋の名称にもなったと考えられる。一六七一年の再建の記録では「それまで板葺きであった屋根を瓦葺きに改めた」とある。後年の唐破風屋根の完成度を見れば分かるように、当時の琉球の建築技術から板葺きの唐破風屋根があった可能性は低い。したがって一六七一年の再建以後、一七〇九年の焼失までの間に唐破風屋根が登場したと考えるのが妥当であろう。

一七二二年に再建された正殿建築を見ると、この唐破風屋根を支える柱(向拝柱)の位置は基壇前面に寄り過ぎており、いかにも窮屈な感じがする。また、唐破風屋根は本来正面の曲線がそのまま裏側まで連続するのが通常の形式である。ところが、ここでは照り起りの曲線は正面だけであり、棟を境に裏側は切妻造のように直線勾配の屋根(両下造)となっている。もちろん技術的には両下造の方が簡単ではあるが、前述の通り唐破風形式の屋根としてはその完成度は低いといわざるをえない。別の見方をすれば、唐破風様式の正面性だけを取り込んで、やや強引に貼り付けたような感じさえする。このことから、唐破風屋根は一六七一年の再建時に造られのではなく、再建以後に増築的に造られたもので、その形式が一七二二年の再建時にも踏襲されたと推測できる。

以上に見たように、正殿建築のなかでも唐破風部分は使われ方も象徴的であるが、その意匠や構造を見ても琉球建築を良く具現した特徴ある場所である。唐破風の変遷は各時期の正殿建築の変遷も含めた究明課題として、今後取り組んでゆくべき大きなテーマとなるだろう。

### おわりに

平成元年、正殿の設計が完了してホッとする間もなく、首里城の本を出版しようとの話が関係者から持ち上がった。今回の首里城復元整備業務の中で得ることができた様々な情報は、県民はじめ多くの人々に伝えるべきであるとの趣旨で、分かりやすい入門書とすることとなった。本の題名は文字通り『首里城入門』とし、各分野ごとに執筆担当が決まった。私は正殿建築などの担当として慣れない筆を執り、悪戦苦闘の末なんとか九月に出版にこぎつけた。また、この年には首里城公園内の展示計画も本格化した。首里城の建築をどのように演出して効果的に来園者に理解してもらうか、という視点に立つ仕事であった。同時に、展示室を設計する上で前提となる展示品の収集にも参画するようになった。十一月三日の木曳式とともに正殿工事が本格化し、年末からは南殿・番所、北殿、奉神門の実施設計が始まり、翌年からはその工事も着手され、首里の丘は一変して慌ただしく動きだした。

首里城の設計を契機にした出版や展示などの事業は、ますます増えてゆくことになった。出版物では『首里城入門』はじめ新聞の連載、建築雑誌などへの寄稿、開園に向けた一般向けのガイドブック、

今回の復元整備事業の報告書であり集大成ともいえる『琉球王府首里城』などがあり、平成五年まで間断なく続いた。展示は展示室の設計から模型やパネル類の設計にいたるまで関わった。なかでも展示品の収集には幾多のドラマがあり、首里城に相応しい品を入手できたことが印象深い。また、正殿の設計から工事に至るまでの映像による記録が進められており、編集段階では専門用語などのチェックやそのまとめ方について何度も論議があった。こうして出来上がった映像は現在七、八本となり、城内や総合休憩所で上映されている。さらに、首里城の充実と愛護、育成を図るため、平成四年には「首里城公園友の会」の結成に関与し、現在も会の運営や諸事業に携わっている。

首里城以外には中国福州市と沖縄那覇市との友好都市記念事業として造られた「福州園」、NHK大河ドラマのオープンセットとして使われた「スタジオパーク琉球の風」の設計や工事監理があった。福州園は平成二年から始まり、福州市城郷規劃設計院の基本設計に基づき、木材や石材の材料からその加工に至るまで全て福州で行い、それを那覇市で組み立てるという作業であった。組み立て・仕上げは沖縄の職人が行ったのだが、ポイント的に各職種の中国技術者が指導にあたったため、中国庭園の雰囲気が十分伝わる仕上がりとなった。

スタジオパークは平成四年から始まり、設計期間二ヵ月、工事期間五ヵ月という突貫工事となり、造成から建築・石垣・植栽などの細部にいたるまで、時代考証を踏まえながら演出効果のある町づくりに腐心した。時間的な制約もあり現場での検討作業が多く、幾多の変更や手直しを伴った手作りと

いえる出来栄となった。

平成四年は九月に福州園、十月にスタジオパーク、十一月には首里城が次々とオープンとなった。私は各施設が歩みだす姿をあたかも「娘を嫁に出したような気分」を味わいながら、やや憔悴した眼差しで見送っていた。

昨年末、久しぶりに鹿児島と東京へ首里城関連の調査に出かけることになった。正殿の基本設計以来、出版物や映像、スタジオパークなどをそれぞれの立場で共に手掛けてきた歴史家・高良倉吉氏、この間の全ての仕事を私と一緒にやってきた建築家・平良啓君との気心の合った三人の旅であった。調査は首里城御内原にあった二階殿の基本設計に伴う関連資料収集を目的としていた。鹿児島では尚古集成館や県立図書館、黎明館を訪ね、中山門の最も古い時期に撮られた写真を見ることができ、東京では早稲田大学建築学科に保管されてあった『琉球建築』の基となった写真のガラス乾板を見ることができた。

『琉球建築』のガラス乾板には本に掲載されなかった貴重な写真数枚を発見でき、早速現像の協力を主任の中川武教授に願い出て快く承諾頂いた。久々に重要資料発見の興奮と感激を関係者揃って味わうことができた。また『琉球建築』の著者である田辺泰氏の関係者のヒヤリングから、初版本では共著で名前が載っていた巖谷不二雄氏の話を知ることができた。それによると、巖谷氏は田辺氏の初期の弟子であり、『琉球建築』の出版には写真撮影や制作に深く関係していたが、残念なことに戦死



されたとのことであつた。巖谷氏の研究成果が今回の首里城の復元の大きな力になっていたこと、そしてまた氏が手掛けられたガラス乾板が新たな情報を示したことに對し、我々なりの感謝の氣持を伝えたい思いに駆られた。

沖縄に帰って間もなく、早稲田大学にお願いしてあつた巖谷不二雄氏の同級生名簿が送られてきた。昭和九年の卒業生四十五名の内、すでに半数以上の方が物故者となつていた。早速、同級生の方々に三人の連名で巖谷氏のご遺族の消息についてお知らせ願いたい旨、手紙を送つた。半数ほどのご返事のなかに学友で戦友でもあつた方から、ご遺族が健在であり、情報は整理して頂けると手紙が届いた。何度か手紙で連絡したのち、ついに平成六年五月、巖谷不二雄戦死五十周年の墓参りを済ませた巖谷定子夫人はじめご遺族や同級生の方々とお会いすることができ、生前の氏をそれぞれに偲びながら我々の思いを伝えることができた。

首里城の復元設計に携わつて八年余、いまでもここまで来ることができたことが不思議でならない。そして、巖谷不二雄氏との出会いは、首里城が持つとてつもない広がりと深さを再認識させてくれたと同時に、これからの新たな出発点をも暗示してくれたと思つてゐる。

(付記) 参考までに、本稿を補う意味でこの間著した文献等を記しておきたい。

。「首里城入門」ひるぎ社 共著 一九八九／九

- ・「古文書を手に実現した首里城正殿」日経アーキテクチュア 取材 一九九二／五
- ・「ウインズ」JAL機内誌 取材 一九九一／五
- ・「伝統建築の復元における諸問題」沖縄 首里城の復元」季刊 木の建築 一九九一／夏季号
- ・「甦る首里城」沖縄タイムス紙連載 共著 一九九一／七、九二／三
- ・「歴史的建造物の復元設計 事例報告 首里城」季刊 木の建築 一九九二／春季号
- ・「首里城再興」週間朝日 取材 一九九二／五
- ・「甦る首里城 正殿復元の実施設計に携わって」建築知識 一九九二／八
- ・「首里城 甦る琉球王国」(ガイドブック) 共著 一九九二／十一
- ・「琉球王府 首里城」ぎょうせい 共著 一九九三／五
- ・「復元ロマン 伝統の継承 首里城正殿 本論」イナックスレポート一九九四／二